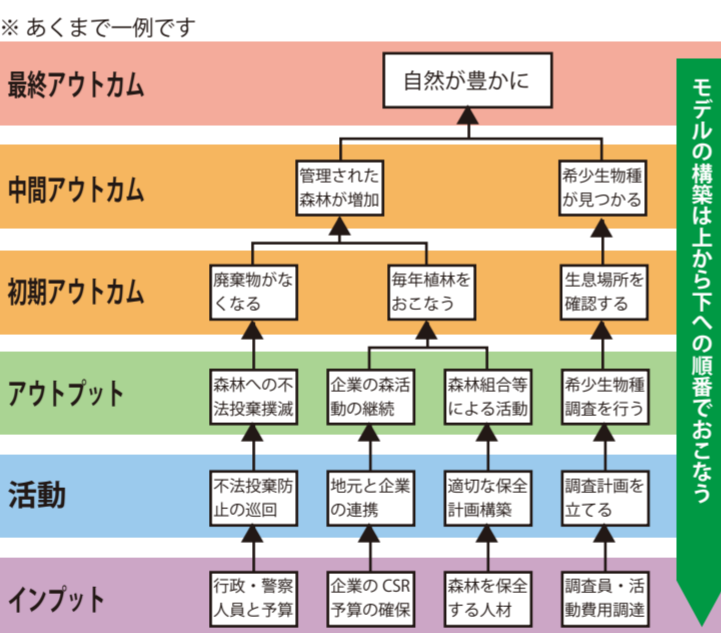
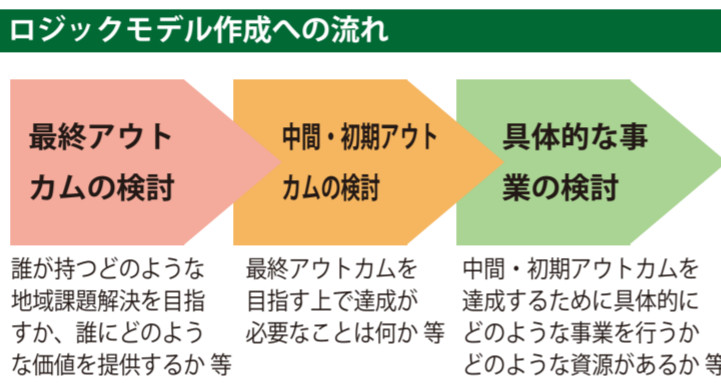
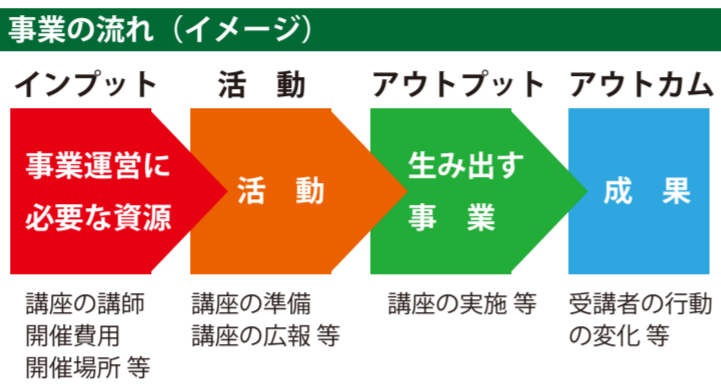




【参考】日本財団 ロジックモデル作成ガイド  
[https://www.nippon-foundation.or.jp/app/uploads/2019/01/gr\\_a\\_pro\\_soc\\_01.pdf](https://www.nippon-foundation.or.jp/app/uploads/2019/01/gr_a_pro_soc_01.pdf)  
内閣府社会的インパクト評価の普及促進に係る調査報告書  
<https://www.npo-homepage.go.jp/uploads/h28-social-impact-so-kushin-chousa-02.pdf>

## 「ロジックモデル」ってなんだ？

最近、行政機関や、「ソーシャルビジネス」「コミュニティビジネス」など社会的意義を持つ事業をおこなう主体、NPO・ボランティア団体など、公共的・公益的な分野で「ロジックモデル」という手法を使って事業成果を測る取り組みが増えています。ロジックモデルとはどんな手法なのでしょう。



**事業成果を把握する設計図**  
行政がおこなう公共事業や、ソーシャルビジネス、NPOやボランティア団体がおこなう事業は、すぐに成果がでるものばかりではありません。新しい施設を建設し、そこに市民がどれだけ訪れたかというところは成果としてすぐにわかりませんが、例えば、介護予防の取り組みをおこなった成果をわかりやすく表現するのは非常に困難です。  
公共的・公益的な事業に投じることが出来る財源には限りがあることから、できるだけの事業の成果を把握しやすくするために構築するのがロジックモデルです。こういった資源をどのような活動に投入することで、どのような変化がもたらされるのかという点を体系的に表します。

**目標からさかのぼる**  
ロジックモデルは一般的に、事業によって達成したい事柄や受益対象者の見込をたてることからスタートします。達成したい目標や成果を「アウトカム」といい、このアウトカムは場合によって初期・中期・最終のよう

に時間経過に合わせて区分することもありますが、アウトカムを達成するためにどのような事業をおこなうのかを時

間軸をさかのぼりながら検討し、それぞれの事業に必要な活動内容や資源を検討する、という流れで構築します。おこなう事業のことを「アウトプット」、活動に必要な人材・資金・物資などのことを「インプット」と呼び、①インプット、②活動

③アウトプット、④アウトカムの順番に事業が流れていきます。もちろん事業の内容、必要な時間などによってロジックモデルは多様な形態が考えられますので、これがすべてではありません。しかしロジックモデルを構築することで、最終的な目標だけではなく、短期的な目標、中期的な目標がより明確になるだけでなく、仮に短期的・中期的な成果がもくろむとは異なった場合の事業の修正も容易になることが期待できます。

### 1週間って知らない話 NPOの

## 第14回 NPOとは？⑭

今回は、NPO 法人の決算書類で特徴的な「ボランティア受入評価益」「施設等受入評価益」についてご紹介します。

これらは民間主導で策定された「NPO 法人会計基準」に定められている費目で、NPO 法人がおこなった活動の「原価」を計算書上で明らかにしたい場合に使います。

★ ★ ★

NPO 法人の活動はたくさんのボランティアに支えられていることが多く、そのぶん人件費をはじめとした費用が抑えられることがあります。

スポーツイベントをおこなったと仮定しましょう。運営ボランティアに20人来てもらい、朝9時から16時までの7時間、運営を手伝ってもらいました。ボランティアには昼食とお茶代として1人あたり1,000円支出しました。そうしますと、イベントの決算書類にはボランティアの受け入れにかかった費用を1,000円

×20人=2万円として食糧品費に計上することになります。

しかし、決算書類にはボランティアがどれだけ活躍してくれたかは計上されることがありません。そのため「NPO に事業を任せると安上がりになる」という誤解を生じることがあるという指摘が NPO 側からあがるようになりました。

仮に、先の例で運営を手伝ってくれる方をアルバイトでまかなった場合、時給900円とすると、900円×7時間×20人=126,000円もの人件費がかかる計算となります。本来はこれだけの費用がかかるということを経営者として訴求できないか、という議論をもとに生み出されたのが「ボランティア受入評価益」の考え方です。

同様に、NPO 法人は非営利団体ということで、公共施設の利用料が減免になることがあります。支援先の個人や企業の厚意で施設や設備を割安で使わせてもらうこともあります。こうして削減できた費用も、計算書類のなかで表現できないか、ということで生まれたのが「施設等受入評価益」です。

★ ★ ★

ボランティア受入評価益、施設等受入評価益は、ボランティア評価費用、施設等評価費用と一体で使うことが求められます。したがって、先の例で126,000円

をボランティア受入評価益に計上する場合は、同額をボランティア評価費用として計上する必要があります。これらによって、スポーツイベントの開催には本来は126,000円の人件費が必要だったんですよ、しかしボランティアとして来てくださったので無償で済みました、ということが表現できます。

なお、これらの評価益はやはりもくもに計上することはできず、相応の根拠が必要になります。ボランティアの名簿や活動時間、施設の利用時間等がわかる書類などに基づき計上しなければならないほか、単価については説明できる根拠が必要です。単価については計算書類の注記にて記載が求められます（例：ボランティアによる役務の提供は〇〇地区の最低賃金によって算定、施設の提供については●●公民館大会議室の1時間あたり利用料金によって算定、など）。

★ ★ ★

全国的にみると、こうした「評価益」を用いて活動の原価を明らかにしている NPO 法人は少ないのですが、NPO 法人の運営には一定のコストがかかるということを正しく認識いただくことが求められます。

こうした手法がある、ということを知っていただければと思います。

NPOってボランティアが手伝ってくれるんだから費用が安くあがるんでしょ？

ボランティアが来てくれて費用が圧縮できるのは確かだけど、活動の趣旨を理解してもらおうと相応の手間はかかっているし、安上がりで決めつけられるのは…

計算書類に「評価益」を導入すると…

本来はこれだけの費用がさらにかかるのに活動の趣旨を理解してくれたボランティアさんのおかげで費用の削減ができたんだね

…と、NPO の本来の趣旨が活かされていることを伝えることが期待できます。

ボランティアのみならずにも活動の価値を計算書上でお伝えすることができて、ありがたいです

ボランティア活動の価値はなかなか伝えられないものですが、計算書上で表現することで価値を伝えることができます。このことがボランティアのさらなるモチベーションアップにつながっている事例も報告されています。しかし、ボランティア活動を貨幣価値に換算すること自体への懸念の声も少なくありません。あくまでも「活動の原価」を明らかにするためにであることをご理解いただく必要があります。